

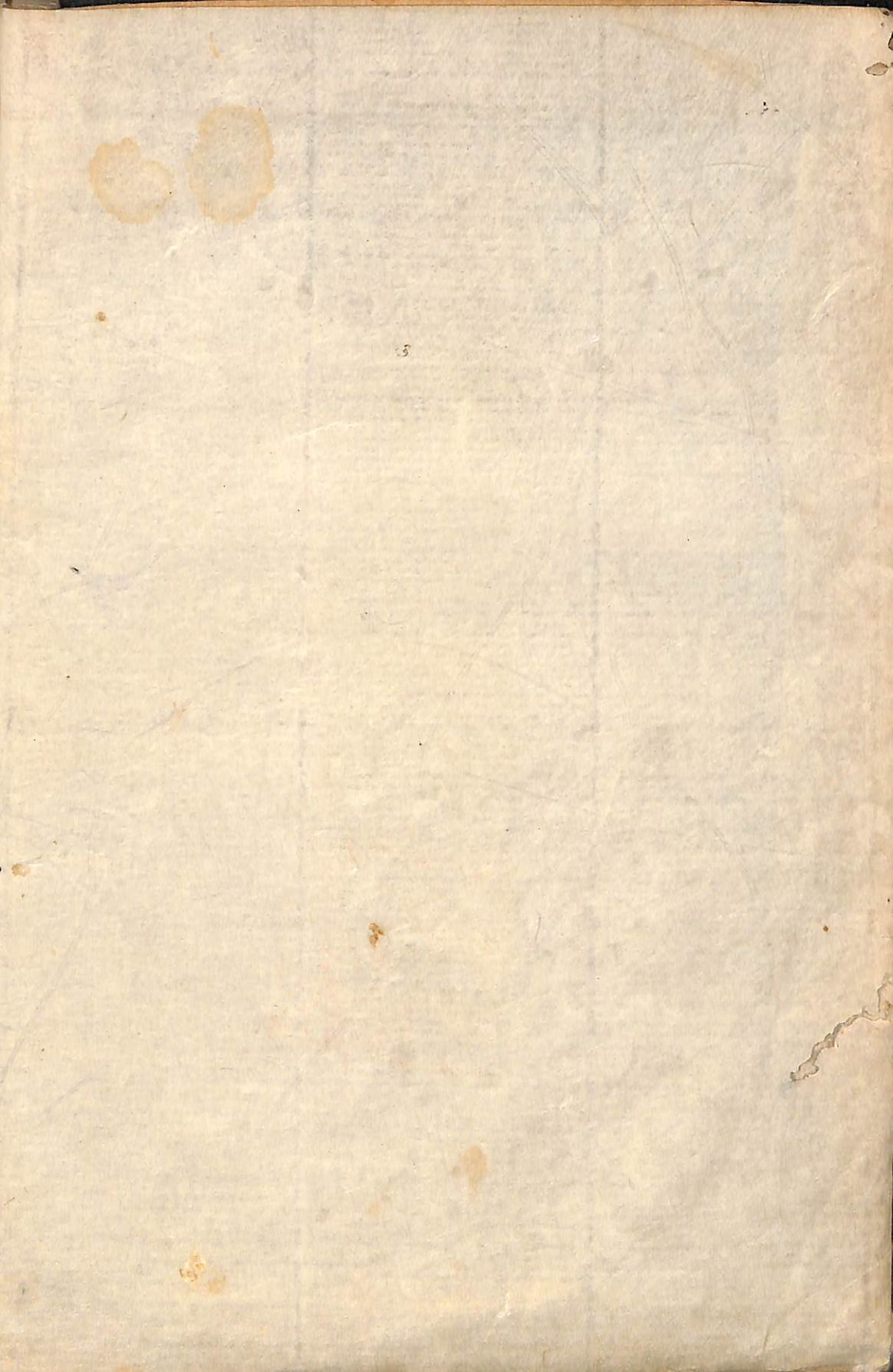
911.3
x
義

滑 稽

銘錄集

義





滑稽銘錄集卷之二

尾陽沙門 馬州 撰

名護屋

剃髮辭

夏雪庵

冰蟲

公道^其世間^ニ惟^タ白髮貴人頭上^ニ不^レ曾^テ饒^サ予

既^レノ齡半^ニ百^ニ何^レカ^ニ以^テシ^テ六^ト多^ク安^ニ過^スも

官途^ノリ^テ居^ルニ^テ乃^チ孔^ク白^ク髮^トナ^リト^シテ^ハ何^レカ^ニ

年^ノ少^クニ^テ猶^ト所^レハ^シテ^ハ何^レカ^ニ以^テシ^テハ^シテ^ハ何^レカ^ニ

己^ノ男^ノ解^リテ^ハ何^レカ^ニ以^テシ^テハ^シテ^ハ何^レカ^ニ

くちまのれま入るる時紙と八徳りゑる者
合のよむ難き友尚ほかゆらげて風騒の
閑人へまはるるにたふら易くし

別膚はまきりつゝ世の繁れは雪

乙卯窮臘日

雪よま写し七三とくふ内 氷蟲
窓のまのれ纏りゝゝゆ敷松茂
満月は塵^{ヲサ}かゝる人れ平とくり

一れ字とちうれ上代や雪乃京

附合

きよき世の平よと括よ成終ひ
深くもほろむぐれぬ定業

天竺の満月ゆりて雪とく
氷貴

心身乃くゆり 竹の精霊

よき世の目で結ばると暇とけ

る監人の牽制しあり

七種之如之如之如何の樂
高九之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
神之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如

山紫

龍香

曉雀

此如之如之如之如何の如
湖の時如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如

固培

水工

辭世

一念之如之如之如何の如
此如之如之如之如何の如

寸青

と家難とらづ見百人一首歌 岸石
夢^{サス}とりの風はらうとてはの母は 可山
見せんとてんでうもげやまらむ
るにせれはうんであつりのほり 間泰

碓賦

宵月

作^カ摩^モ生^{サン}乎^カ碓^カ生^カ涯^カ云^カ干^カれ^カが^カま^カら^カう^カ
サ^カう^カく^カち^カ程^カ大^カ師^カの^カ蹟^カと^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カ
大^カ燈^カの^カあ^カら^カう^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ

とらうとてまう一佛^カを^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ
向^カの^カ海^カの^カみ^カれ^カ形^カの^カ似^カら^カう^カ杯^カの^カ撞^カは^カの^カあ^カと
し^カの^カ中^カ日^カ月^カの^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ
酒^カの^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ
初^カの^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ
因^カの^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ
と^カの^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ
毛^カの^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ
と^カの^カあ^カら^カう^カら^カぬ^カに^カ編^カ也^カれ^カま^カら^カう^カら^カぬ^カ

常られ金物にんし初高うれ 奇水
夕立のやうにびせらるやまの坊
新法師の登りゆくお徳
けしきと草少龍のやまの坊
少龍の徳輔うまてあまさす山 可星
堂のふらゆへくお徳づら
程のせはふらなりやまあふ山
うまあひ女性くまら水仙花

楔原

琢磨

世もく楔と云ふおれえと思ふはあまら
ちのより月の楔はまの山乃楔花よ
又総れ脊中にむねのせきこもらあま
可くと麻鶴の神徳なましくて要ふと
いふ楔は少室の白輪柱の楔従者ふ
まのひさびさあり、おれ乃楔一切のお徳
たうてはまふくくとも今もあまらあま
山風清燈乃楔はまの山煮煮庵の楔花

おのゝろの御

一年に於て極志の如き雅の声

白虎と清く山の花の如く御 琢磨

探る如く袖とくさし如くおのゝろ

乙姫よるの道くさしおのゝろの月

山崎の如く雪よる夫狭くおのゝろ

附合

月よるを色懸いと色くと如くおのゝろ

じよと如くおのゝろの如くおのゝろ

おのゝろと如くおのゝろの如くおのゝろ 琢磨

おのゝろと如くおのゝろの如くおのゝろ

おのゝろと如くおのゝろの如くおのゝろ

おのゝろと如くおのゝろの如くおのゝろ

おのゝろと如くおのゝろの如くおのゝろ 琢磨

おのゝろと如くおのゝろの如くおのゝろ 当然

おのゝろと如くおのゝろの如くおのゝろ 可欣

附合

葡萄の房は庭のまはりにまきかき

乙配の影のかきかきと日月

他多の影の影をかきかき天狗草 可飲

妻ふ梅追ふかきかき早瀬川 兔園

夕の梅をづつつかつかつかつか

年の尾は細工藝あつた花雀

人里乃あつたつたつたつたつた 素大

川のゆふのゆふは化装かきかき 東唄

羽てまきかきかきかきかき

たまきかきかきかきかきかき

お影りかきかきかきかきかき

一度らかきかきかきかきかき 古梵

かきかきかきかきかきかきかき

色影とまきかきかきかきかき

花影やまきかきかきかきかき

影法師とまきかきかきかきかき 櫻川

百度とまきつ流ぬまのてれに女櫻薫

馬士説

芝流

たしくあらぬがらうて世の形形流れは極く
とびとびふるふる士のあかどらうまらばし
とち月影り一そあれえ結と女むじぶて
或ははぬまうら角くさうまむのさうま
たまごの信しく裸身れこころは後深の
都づうとんご後物のまゆくやあゝそ
存まの結子ふるぬ終うーそら月月よ

性還ぬぬまきり大声れ一かゝる金金あり
乃やれ程ふまきせらぬぬらえこのひま
あぐらぬもふ俊らけらぎら移るは付り
あさひのつらとせむれ志このも又やむが如
旅人のまきよ月夜はゆてにんぐまは
る何れくさたけくさあ声とまむあしく
いれあひのひくはまらあまの悪口て
あましくもる後まき一誰とくさうまよ
望まねくと結よ刺のまらけらあ

何處の何となくお女子別後多腕
 入ホシロ穂きくらん中れ志候一たましーうま
 びくてもお片しき業う別て丹波と心と
 更ゆりーもあつやきー一英漢の物候よ
 近江のそと取とらとららけき結候よ
 生涯とふれりーこやう馬子控候一て
 本坂が貸あぬらう控一やまきまの
 ころころとららら

有る處よ一ととたからら

子と控ふ敷れ何らけあき葉摘 芝流
 ふとゆのお長月れ何や白牡丹
 輪書あ乃さるや中れうおもて
 乱抗よ信よと響き氷控れ

附合

玉味寄りのあまはきりー初梅
 七十一め時とららら海内 芝流
 おんあーて世勢よ二三
 校しららられねが行な

月影れ勝くくのぞくみそ影 志流

花より伝せくぬぐりみ 雲龍 故洞

雲招堂

三つとあじりのあやせり

草付うく下りくよくらや菊田

物の困れなきやゆき等の能はる

附合

卯引の蝶よくく纏ち月干

御のくくもと竹乃小役

目の乃くぬは松者ゆ伝ちちがり 故洞

常るれく月青の舞くくみそり 三林

はくろりな影かきくや紫のくれ

くは後乃はくくくいでや床くぬ

竹ののや石たの影如く春くは

侍櫻はは家か柱根め孫く風吹

なくみりはりくや室の生綿お

くのみくくく大くくく葉と傳あくら

中世替りかゝる世の心はかゝるもの
 世の心はかゝる世の心はかゝるもの
 七里越とくしは追ふるも海に舟
 鳴るは月よ影の影にれ嘆の如
 みはくもれは水やのきくも土の心
 おもはるは海にくはくもや芽の徳 雨江
 くの若くはくも南のやとらてん 宿夕
 むらぬるも心 のぞくや山おとと 推和

鳳巾箴

計珠園 椿又

けし〜風中は勢はとたつたに〜
 風多し揺るも〜
 一時乃字難り侍て切石の定とよ〜
 或は板板の指は影は〜
 引〜知を〜
 お穀のたれ一古れ〜
 今上本堂見乃侍〜
 水沈れ〜中は〜

まことゆかしくそよわくやち及入ことの
思ひをれ枝玉う空教尺舞ふ中よくは
一まじい袖と籠りて清くちと望みぬをれ
法師波のぬり世多中と修より
奴海の連年度中強背志冠也も
体一うちおほえよ思てそく流沛の漢中
帝業とて建りて項服の鳥は其多と
死と蛙のよ世に雷れちる鳥啼
海へののりり吹風れよ記子倦て誇る

まことゆかしくそよわく

紙をち切るとも本生等とある

春風汀
暮帆

まことゆかしくそよわくやち及入ことの
思ひをれ枝玉う空教尺舞ふ中よくは
一まじい袖と籠りて清くちと望みぬをれ
法師波のぬり世多中と修より
奴海の連年度中強背志冠也も
体一うちおほえよ思てそく流沛の漢中
帝業とて建りて項服の鳥は其多と
死と蛙のよ世に雷れちる鳥啼
海へののりり吹風れよ記子倦て誇る

是れは包事一糸一毛不易を備へ
 陰の如く一由天より降るちちりあり
 一と志清くして教子の備へつゝ
 うらも新しく水たまりありて
 又原島の木ありて茂くきまきも原く
 一して互夜と全きしぐんおおくも全ハ
 善くしと良くしは風の若きと凌ぎ
 是れと定めて屋漏の愧へもたし
 定まりて何れもお世と月空右士の畫り

際も 舟に載りて海をりておぼえん
 一は一幅として海は勝と空は
 安しと心もなほ海を嗜む
 昔より人とおとくもあつと人のあつ
 一飲少しと心もなほ海を嗜む
 昔より人とおとくもあつと人のあつ
 予空を乃門はあつと年一は風程の
 是れを定めて居て虚く何れも虚に

くじの江世流より瀬く帰れ
享保二十二年のツ

夏栴やち舟種およ混奉分源と庭清波

白多やとあうしにらとや中とのあま

山あしも浪き中らちめて熱播強

岸のふは抱はるぐちのて火桶うれ

附合

と富れたる思後と思ふも大陣堂

若く思これ中とゆき

重盛たはるもいくの氣あつてはは

あふらばははらる痛れ何そ思

十士ののそと建まはるり

赤味鳴るは流て切くあひせ

あまの角て中かきりくこれの魚空流下千里

かきりたははらるる魚の只はるり

月代とたふあづら如伊はなと

當代の風や身を毛のりてか城 楚か
抱つ花やまゝ惆然と起わづら

附合

ふあふ有素乎とあれおの素

おほくの尻いほらのあつらひ

彩色の流るにんまの心能のた せ

南山臺

甲寅霜月九夜子時靈夢 悠醉

丈ららよ二種あらとくも虚室の志くねりも

猪神風狂の命へ中とておてお依と

責布祢大明神文臺ヨリ御声高う

とよれらりらにむらと輝く

天照太神御袖ヲ揚テ予ニ付句ヲ教玉フ

梅の毛ひくく梢よ如らして

明日書ヲ開ケハ天神ノ詩ニ應ス

月耀如晴雲 梅花似照星

可憐金鏡轉 庭上玉芳馨

附合

後針の一味に刃をくくつて

種くくくくも足中を中

唐土の世界の世を氷に業 悠醉

長板家乃末く其さ紅粧れ吐雲

そらまゝに拍子よ味喰ひ拍まゝ

故郷よりよご所あやうたを 唄鈴

馬ふりて居ればや留程が喚排

葉虫のいも感と居る 九月五 仙角

辛皮れさしや海の中れみ 二木堂 定隆

鶏乃志がし尾もく 葛蒲堂 鴨井新 桐雀

深界れ地ゆも柿の志がし 推角

よめてる素くくたがたや子もま

照後乃世伝やも深れ能因作

裸乃て怪むくくや冬も梅

ゆらりゆらり 吟枝

おのろく 契至

り 秋の末もよきう 伊吹山 素人
極きり 七の宮の木の木の

附合

舞のよき際と好きも昔風
東海去り北平 千六百余里
此より旅多約来たるもや
部より 鶯のや
淡相場 海に ね月のは
巻業乃 巻れり ころ ころ

まじりながら 今の中 夢とてあれ
流るる 水は 舟に 舟浦舟
右の世 主人の 教法師 ねたね

瓦山の 金布を 作らぬ ねたね 可考
川越 一と ころ ころ ねたね
涼し とも たり ねたね 教法師
眠る ねたね ねたね ねたね
中業 ねたね ねたね ねたね

沖賣もぬらふはじし境峰 丁者
 新法師と大づかきと由れら懸成
 寒あふや少のくしくとどるらち
 雪もく細の襖くくひ青くれ 波鳥
 さきざしのふしもかきつ子れか
 吸角りり入るしんくく籠のふ
 山置れ後空をまきき 初附由
 乾坤の口れ志まゆや九月並 左立
 涼きや鳥羽子雲てき鳥 左林

清見瀉賦

平糞苑

錦思

波はさやけさ法尺くくくも海月一の佳系
 ちりきりやみくくくくくくくくくくくく
 伊豆の山崎くくくくくくくくくくくく
 海月舟をたふくくくくくくくくくくく
 何くくくく保のねあくくくくくくくく
 之極は始乃公多くくくくくくくくく
 此不たきくくくくくくくくくくくく
 名くくくくくくくくくくくくくくく

愛鏡一鏡の凡庸な女よとせよとて
 思ひ申はさしとてしるはせんとて
 女士の隙子と母の妻と此の法師と
 慕ひて我故の母り何れは成す
 くらむはたはたはれぬうにいと相模の
 玉の持人の妻の形はよとてはてしなく
 二世の女はれまじけり成す
 ちりてと成すはとて思ふはあはれ

及魂香れぬ成すも遠く玉の霊の怪
 ありとせよ只何となくしるはせ
 女はたはれぬ一は女室の女
 思ふとてやうしてはる己よあはれ
 娘一は母の女はれぬはれぬ
 女はたはれぬの袖とてはる連理の藤と
 思ふとてはるはるはるはるはるはる
 思ふとてはるはるはるはるはるはる
 うらやうはるはるはるはるはるはる

北きりくわらむはなむかひの西影かへ
まらふちりて一あきり一雪のうらむかへ
境乃風情むらりてあじおのめくはな
きんり

我と我抱んで笑へ境の山

堂のし色やぬ日乃かくや炸 錦思
このかをふかば髪も及くそお細め
懷帯北人の業としらりの山務

かきこひすすもや直越ぬみだしおん
中原のまきまき烏帽子又おんげり
そなのほうきとく 鬘りめ死わらひも
まふの月ふれぬはふりつ後とら
あふち編目かひらぬ風つふ
籠つりつさづらて忍ん室の梅
初雪や枯る雪の山は青志ざら

附合

人形より磁石仕込んでの事

日輪のまのまの光あんなに

善信少公殿の写子おこさし事

深思

ちくちくおはるに候氣遠の

諸軍の所へ候る候し事

じうしぬらへ泥染のうけ稿

浄益挑灯のまねつらと

事らふまうけて候し事

天女たうし事まうに候し事

事よんで候し事大佛の座

後中お廣いらとたうし事

やうく候し事おれと八人

屋敷に乃人よ事らと候し事 梅白

百千と掌て候し事案山の候

候し事おれ事らと候し事 梅白妻

一年乃計る事らと候し事

彰法師よ候し事何や候し声

何と候し事候し事

梅白子六歳

二葉

草深乃とあはれ乃ととを飲つて那 梅曾母
を執つてふ藤の女とあはれ乃とあはれ 思英
一ありよ中々心ゆくや郭一と 砂白 古人
昔懐れを神のまはれやよ下園 龍一
河を流しては流れあはれ乃とあはれ乃とあはれ 初汲
夜を流しては流れあはれ乃とあはれ乃とあはれ
雪乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ 杉呼
凌雪の極く乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ
満月乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ

辛子乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ

附合

吹けよ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ
少よ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ
海乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ 松呼
柳の枝乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ
顔乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ
位牌乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ乃とあはれ 人

くらげのしほにぬるまじゆの氷鶴七人 吞水
 蔭の魚乃おしらほしー白の柳 楚介
 ちりりしとぬぬく音の百合のち
 神の糸やせりー魚の抜き糸 柳
 燈のきゆーお白ー雲の心
 ハナ子強きくしよ勢のち福喜古 虎角
 若き善の紙をくまけきぞれ柳古 圓桔
 空のりやまよふ餌づくむ古 雀 助次
 下清とくうやうに幸ー一水酒 風笑

驕馬箴

馬州

白澤めしきく人の知とまふふの唐土の
 石あはれをひくーひるふはひるふしひるふ
 世相天のなみり下まきとまふと清の徳の
 聖くしきしーしこの眼は日月と照く
 懐猛れ尾と天下ふぬぬくくくくく
 こまけり或付いしよつりまは病むれまは
 毛ハ泥よまがれ舞く徳とたまきまは
 皆ともくしし心りのや穢まの回向は

畜中よりたはやくはらへし周の穆王とのまゝ
 新郷は雲より玉つとは金よりたはやく
 子耳風の囀るはあふと或は艶たるは
 いろしめ玉照君と道なきは夷乃る人
 たりしころはくしん思ひのまはれし
 皮と花と美人とまきとまきとあふし
 揚つてはくしん又も西午の浮きまきと
 ろしし情のたたりしはゆき物捷コンティの
 檀特しりぬるはあふと或は艶たるは

富士の裾をたはやくはらへし
 後れしころはくしん思ひのまはれし
 靴草とどろき空の中にたはやくはらへし
 雲より玉照君と道なきは夷乃る人
 妖術も怪談伝書も記されし一の思ひ
 たりしころはくしん思ひのまはれし
 子耳風の囀るはあふと或は艶たるは
 いろしめ玉照君と道なきは夷乃る人
 たりしころはくしん思ひのまはれし
 え陣のまきしん思ひのまはれし

功成を遂ぐく由郡もくしんを以て一節乃
ゆる相只ぐさ者夫の豆此一益益さらんら
其盤階子れ世中より一巻一巻小雲の巻よ
うし見しはさるの御きたる骨おてるはたの巻
しんが信長しり等しりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしり
陰陽師のしりしりしりしりしりしりしり
あくしりしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしり

坂をてしりしりしりしりしりしりしり
若ししりしりしりしりしりしりしりしり
尿おくねえしりしりしりしりしりしりしり
上たしりしりしりしりしりしりしりしり
細とせえしりしりしりしりしりしりしりしり
んねえしりしりしりしりしりしりしりしり
るの念佛しりしりしりしりしりしりしりしり
馬しりしりしりしりしりしりしりしりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

思へとも須弥山と告ぐして陰海と名懸
とて此洲やわんて此まていざいざい
唐の天子地うにんことんをれくこのは
唐とて教行しきかく流馬蹄のこお
怒る馬のたふさるぬのまひしよは伏し
後りしきまびの大将さうぬらける

杜父魚辨

馬州

北條り杜父魚あつと、カサゴ吹ぬ実のま
して又教しも何ら寒中ぬ水の上は浮い

後と危雷ようこせくあしはや鳴年
聖なるあこれ杜父魚ゆらうれかくぬ
教千丈の流と堂つとて功をば求る事古と
婦の赦さるりのせしとて起板は屍と鳴と
初とさうしあしげとるれ男は初と鳴と
杜父魚の切實し年とらうとらんがうは情く
年比の外流とらうし流とらうしとらう
小島りしとらう水屋子伝実中れ大徳と
ゆらうとらう約汁の二にあしとらうと

素書は好て、親母子付傳ふらむ海一
半ありききく籍くとぬるし腸はさる
くやくいさる指はじしと一しねはなも
静とちしつて他人のさしもたししは
三降北風はまははる事らるれ

白中より料理の言や筆の記 馬州
お代りもさ海のものきく在ぬれ
手交さる伊豆へるく富士指

石竹ら安法ありきよら
と去月の思ふや世の骨海は因
蛇の團れき危なげなや菊島
較よ似せたるらしきとさ
大空より雲ふ海や空を海

附合

信濃のききかしくは變な
かればお進みたるら
合殿のききかしくは馬別

空をたぐりてゆくあまの風の音

温泉の湯の熱気は例の如くも

まよふまよふはたきまゝはたき 凡そ 一三列

追刺はよふまよふはたきまゝはたき

之日月の影は日よりの影にあり

土管おと実^{ナツ}のまよふはたきまゝはたき

強いのち葉もまよふはたきまゝはたき

塩く白き風森くしく古社

子たまたまのまよふはたきまゝはたき

このまよふはたきまゝはたき

朝の霞くしく向りてまよふ

まよふはたきまゝはたき

花薬欄

天一のまよふはたきまゝはたき

大佛のまよふはたきまゝはたき

まよふはたきまゝはたき

暖ハや実のまよふはたきまゝはたき

枯まよふはたきまゝはたき

蘭哥

水よりし海は如膝下の風中 三和

おのの言はるゝ化轉や少少賣

あて消と聞よるたはれ海をさる

山をた機をよめるやまを木立

山をた山の中や徳乃婦尾一娘般了

あゝ置れり士や祐めら赤躰濁 柳絲

あゝのねと山海をやとれらる五百八

あゝ無乃たさるる路りヒツゲ睡 一紫

夢中辨

九華臺

十又

深更の刺家あゝ種あは原耳と夢さ

角とカク種とと忽をさしてまらやうん信一人

杉衣の袖とささるゝのまゝさ第は梅の結さ

ちよチヨ蕭シヨウぶとれたの種ささとさるゝ足母の鉄の

履とつとじおとさほほ深原集れり人さる邊

張寒さう言えはらゝ種は海をさるゝと踏て

風形乃穴と披りりりてれさりと拾ひ集て

あゝあゝと世を雨のてさ家敷よさるゝはと名れ

十七字と云海と云風の古味は味くよ
 名又と麻はまゆと遊路り及くと船揚の奴と
 かつて水く島とたれは多おと梅と屋とん
 少やとるをて汗と拭しと麻をの跡は向
 一ゆとちりり白と赤と

細よとらうとまのつと



